

植物系男子の

日常

I love boring life

Kyaji

植物系男子と名乗っておきながら、彼女がいるとはどういうことか、裏切りではないのか、謀反ではないのかという声を方々からよく聞く。

勘違いしてもらっては困る。植物系男子と草食系男子を混同して考えるから、そのような途方もない誤解をするのだ。植物系男子は草食系男子の延長線上に存在する生き物ではない。ふたつの概念は地続きではない。モーゼが通ったとされる道のような深い断絶が両者の間に存在するのだ。

改めて述べておきたい。

草食系男子とは、基本的なスタイルとして「待ち」を選択している犬のような奴らだ。いやそれでは犬に失礼である。彼らのほうが聞きわけがよいだろう。とにかく奴らは、待つ待つ待ち続けて、自分を発見してくれる、現れもしない乙女の出現を待ち望んでいる、哀れで意地汚い、罵倒の言葉をホワイトボードいっぱい書き表してもまだ足りないくらいに責めどころのある連中だ。

一方、俺たる植物系男子とは、広義にいうとスタイルは「待ち」だが、そのじつ、何も待っていないという点で草食系共とは一線を画す。奴らの卑しいどろどろとした欲望は、俺たちにはない。とてもきれいなのだ。なかなか信じてもらえないのだが、そこまで疑う根性が卑しいと俺は考える。じつは草食系なんだろう、単に格好つけてるだけなんだろう、という主張は即座に却下である。議論する価値もない。そういった奴らには、俺は憐憫の情を禁じえない。

第一、彼女がいることがどうしたというのだ。いないほうが不自然で不安定な状態である。希ガスのような安定構造にないといえる。さっさとどこかから電子を拾ってきてイオンになったらどうだと俺は言いたい。つまり男は非金属なのかという化学好きの奴らは相手にしない。「電子を拾う」という表現から二次元女子にまで発展して熱く語り出す連中についても同様である。

つまり、植物系男子とは、草食系男子の地続きにあらず、社会的一般的条件を満たしながら、万事に対する興味関心がひどく薄い人間のことである。誤解のないようよろしく頼みたい。

一回生の夏休みが終わり、後期日程がはじまった。俺が所属する高分子工学課程では、もう実験がはじまるそうだ。これが長い。授業時間が長い。昼すぎの三限から五限までである。しかも五限終了の時刻には終わらないことが普通だ。平均して、だいたい七時くらいが終了する時刻か。つまり、実労六時間ほどである。

これで金曜日の午後がまるまるつぶれてしまい、終わったらレポートを書かなければいけないので、続く土日は廃人に近い状態となる。レポートの提出期限がやけに短く、実験した次の日曜日までに提出しなければいけない。つまりレポートを書く時間は二日ほどである。

これが厳しい。俺は土日も大学に来て図書館にこもりレポートを書かなければならなくなった。本気を出せば一日で終わるのだろうが俺は本気の出し方など知らず、また俺の辞書に「本気」という文字はない。概念なくして体現は不可能である。

平日は講義または実験、土日はレポートまたはアルバイトという多忙な日々を送るうち、俺の身体に少しずつ疲労は蓄積されていった。心の部屋が疲労の埃で埋もれていく。掃除をする時間

はなかなかとれない。俺は日に日にやつれていった。

ある日、生協食堂表にあるベンチで煙草を吸っていると、いかにもわざとらしく「あら、偶然だね」とレイチェルがやってきた。じつによそよそしいのは、校内では他人でいようという意味のない取り決めをこいつが勝手に提案し、俺が承諾したと思いこんでいるからだ。

「よお」

「ねえ、私太った？」

他人でいるのではなかったのか。なぜ他人の俺にそんな個人的な質問をするのか。

しかし他者の意見を尊重したいという考えなら、質問も不自然ではない。俺はレイチェルの身体をじっと見た。

「べつに」

「私が牛に見えるのね！」

なんだこいつは。なんのつもりだろうか。

「もういいわよ！」レイチェルは怒った顔のまま俺に背を向けてすたすたと歩き去ってしまった。

考えるのも面倒だが、ほかにすることもないので頭を働かせてみよう。疲れるようならすぐに機能を停止しよう。

太った？ ときかれて、べつに、と答えたのだ。牛などという単語はどこにも混じっていないし、生協近くに牛がいるわけもないし、昨日の夕食がビーフシチューであったわけでもない。

どうして牛に見られたなどと勘違いしたのだろうか。

いや、疲れてきた。考えてもわからない。答えへの道筋がまったく想像できない。

俺は煙を深く吸い込んで、一切をあやふやにし、煙に混ぜて吐き出した。

それからしばらくレイチェルから連絡はなかった。連絡がないことに気づいたのも、校内で見かけないなと思ったのも、アルバイト先でどうにもそっけないと不審に思ったのも、一ヶ月後のことだった。それほど俺は日々を必死に生き抜いていたのだ。

しかし俺の日々の生活は、普通、あるいは動き続けるのが好きな人種にとってはまったく苦勞などしていないように映るだろう。というのも、俺と普通の人々の間には、必死感の認識について差異があるからだ。

忙しいとは、毎日分刻みにスケジュールが組まれていて、自由な時間はトイレで用をたすくらいしかないことを言う。しかし俺の場合、毎日何か用事がひとつでもあれば、それで日々が忙しいと感じるのだ。

この毎日の用事をこなしていくことで、俺は充実感を持ち、日々を生き抜いていると強く思う。トイレで用をたすくらいしか自由時間がない人間からトイレトペーパーを投げつけられてしまうかもしれないが、それは個人の受け取り方の相違であるとして、とにかく俺は日々忙しい。

毎日何かあるというのはじつに充実していないか？ それがささいな用事でも、明日を生きるための目的があることはいいことではないか？ そう思わないか？

「お前は間違っている」

季節は秋と冬の狭間である。そろそろ肌寒い空気に対抗するため、俺はぬくぬくするフリースのパーカーを身につけていた。その上から白衣を着ると驚くほどあたたかい。

実験でひと息ついたため、俺は入口近くの喫煙所で煙草を吸っていた。隣に慎也がいて、シャーペンを指先で回している。

「いくらでも自由な時間を持て余してるだろ。昨日なんか一、二限だけだったろ？ それで、ああ一日終わったってか？ 昼以降まるまる空いてるじゃねえか」

「充分だろ」

「充分じゃねえ」慎也が俺にシャーペンの先端を向けた。先端を突きつけられるというのは、いかなる道具でも気持ちのいいものではない。俺はお返しに煙草の先端で慎也のシャーペンの先端を焼いてやった。

「お前、むちゃくちゃするな！」

「人に先を向けるな」

「口で言えよ！」慎也が叫んだ。

「言っただろ」

「とにかく、お前はもっと自覚すべきだ」

「何をだよ」

「大学生生活ってのはそんな調子じゃダメだってことをだ」

こいつの言わんとしていることがわかりかねる。俺にどうしろというのだ。まず、なぜ俺がこいつに自分の行動についてどうこう言われなければいけないのか。

「お前の言いたいことはなんだ」

「もっと本気にならなけりゃいけないってことが言いたいんだ」

「本気になるとは？」

「いいか、お前みたいな風みたいにふらふらと流れるように生きている奴はな、いつか絶対足を止めたときに悩むことになるんだよ。普段からきちんと目的意識を持って行動してないと、のちのち馬鹿を見るのは自分なんだぞ」

なんだかいいことを言う。じつは俺の本質を的確に突いていたので、俺は慎也を称賛してやってもいい気持ちに駆られた。しかし、俺は他人を甘やかしたりしない。相手が男なら特にな。

「お前の言うことは正しい」俺は本質を突いていることだけ認めてやった。

「しかしな、大学生ってのはそんなもんじゃないのか？」

「ステレオタイプに逃げるんじゃないよ」ぴしゃりと慎也は言った。逃げる、という単語が使われたことがいささか癪だったが、腹を立てるほどではないし、間違った表現とも言い切れなかったので流しておいた。

「もっと積極的になれよ」

「それが言いたいのか？」

俺の口調は攻撃的だったかもしれない。慎也が本当に思うところが少し垣間見えた気がして、それが不快だったからつい本音が表に出てしまったのだ。

「俺は、お前が何かひとつでもいいから、打ち込めるものが見つければいいと思っただけだよ」

本音を言うと、大きなお世話だと思った。しかし、一般的見解からすると、こいつはとんでもなくいい奴に見えるのではないか？ 友人に対して、こんなことが素面で言える奴がいるか？ 俺はこいつに自分を慮ってくれてありがとうと感謝してしかるべきだが、自分に正直な俺は、世話焼きの友人の肩を叩くだけにとどめた。

「まあまだ先は長いんだ。ゆっくり探せばいいだろ。俺は焦ったり急いだり頑張ったりするのが性に合わない」

「お前のそのゆるゆるで、明日があるさ的な姿勢はな、いつか破滅を導くぞ」

「そのときはあっさり破滅を飲み込んで受け入れるだけさ」

慎也は深いため息をついて、少し笑顔になった。

「本当に、お前ならそうするかもな」

俺のことをよくわかっているお人好しな友人を、今後それなりに尊重してやろうと俺は発揮することがハレー彗星みたいに珍しい優しさを湛えた眼で捉えてやった。

日曜日、実験レポートを提出して大学入口近くで一服し、バイクを出して帰ろうとすると、目の前にレイチェルがいた。

「ようお前、今日は日曜だぞ」

「何してるの？」

「俺はレポートを出しに来た」

お前は？ とはきかない。必要がないからだ。

「何か用か？」

「お昼はもう食べた？」レイチェルがきいた。

「いや、まだだが」

今の時刻は午後四時すぎである。昼も食べ忘れるほどにレポートに没頭していたのだ。

「じゃあ一緒にどう？」

「いいんじゃないか？」

「じゃあ行こ」

どうやら機嫌がなおっているようだ。

俺たちは東大路通りにあるカレー屋に来ていた。無駄に隠れ家的雰囲気を出した店で、表からではなんの料理店なのかわからない。鼻につんとくるスパイスの香りと、ちょうど入れ違いに出てきたふたり組の女性が「おいしかったね、カレー」と言ったのでようやくカレーを出す店だと気づいた。

店の名前は読めない。何語で書かれているのかもわからない。これでは「こないだ〇〇ってところに行ってきたんだが」という会話の種ができない。

俺たちは奥のふたり掛けの席に座った。店員がメニューを持ってくる。黒のバインダーに手書きの文字と写真を添えたものだった。それぞれに注文して、ふたりの時間が訪れた。

「で、何か用か」

「どうして連絡してくれないの？」はじめから泣きそうな声とは、トリッキーである。先の駐輪場での会話のときは我慢して芝居を打っていたのか。それとも芝居は現在進行なのか。いい役者だ。

「用事がないからだが」

用事がなくても連絡を取り合うのがカップルの常識であるが、そんな常識はトイレにでも流してしまえというのが俺の主張である。

「私たちつき合ってるんだよね？」

「そう認識しているが」

「じゃあもつとさ、こう、なんていうか」

「なんていうんだ？」

レイチェルは両手で何かを捏ねまわすジェスチャーをしている。これがこいつの表現するものがあってその表し方がわからないときの癖なのだろう。

「もっとひとつになりたいの」

要するに距離を縮めたいということだろう。ひとつになると聞いて即いやらしい妄想をした奴は欲求不満か草食系か、欲求不満な草食系である。

「こないだ私が怒ってたのも全然気にしてないでしょ」

「いや、結構気にしたぞ」

「え、ほんと？」

「ああ」

気にしたというのは、彼女のことを心配したという意味ではなく、牛という発想がどのようにして彼女の頭に湧いたのかという不思議についてである。だが、今こいつが少しうれしそうなのは、俺が心配していたと思っているからだろう。残念なことだ。

「あれね、ドラマのワンシーンの再現なの」

「そうなのか？」

じつはそんなところだろうとあたりをつけていたのだが、楽しそうだからむやみに水を差すこともあるまい。

「うん。あのね、女の子が『私太った？』ってきいたときは、男は反射的にノー！ って答えないとダメなんだよ」

「それは質問に答えてないんじゃないか？」

「なんで？ ノーって言ってるじゃない」

「どうせ本当に太っているときでもノーって答えなけりゃダメなんだろ。それじゃ答えてないのと同じじゃないか」

「そういう嘘も方便っていう場面が往々にしてあるものよ、カップルってのはね」

「つまり、お前は俺が見てから答えたから怒ったと」

「そう」

「しかも本当はそんなに怒ってないんだろ？ べつに、って言ったんだから」

「それは、うん」

「それでひとりでひねくれてたのか」

「ごめん」

このように大抵は理知的に会話することで相手を封殺することができる。もし相手が意固地になって反論してきたら、そのときはもう見限りをつけたほうがいい。そのほうが自分の健康のためにはいいと俺は思う。

はじめの泣き顔も芝居だったわけだ。まったくこいつはいらんことに熱をあげやがって。しかし本音も幾分か今の会話に混じっていたのでまるまる無意味だったわけではない。

カレーが運ばれてきた。でかい皿に野菜やらパンやら肉なのかゴミなのかよくわからない細々としたものがたくさん載っている。植木鉢みたいな器にカレーがなみなみと入っている。

「どうやって食べるんですか？」レイチェルが店員にきいた。

お箸で食べるんですよと言ったら愉快的店だなとひいきしてやろうと思ったが、店員は「具を全部かき混ぜてカレーをかけてお召し上がりください」と言った。

「普通だな」店員が言ってから俺は呟いた。

「何が？」レイチェルは皿の中ですべてをぐじゃぐじゃに混ぜてカレーをかけている。どう考えても植木鉢の中身を全部垂れ流してしまったら皿からこぼれるのだが、こいつは植木鉢をひっくり返すようにしてかけるものだから、皿の中央をからカレーが山の斜面を流れるマグマのように広がっていった。当然の帰結として、皿のすべてのふちからカレーがこぼれた。

「ああ、こぼれちゃった」慌てた様子でレイチェルはおろおろしている。

「それもドラマのシーンか？」

「馬鹿なこと言ってないで助けてよ！」

どうやら本当に困っているようだ。しかし考えたらわかりそうなものである。こいつは馬鹿なだけだと思っていたのだが、その馬鹿さ加減が本格派であると今気づいた。世間では的確に言い表す言葉として「ドジっ娘」というのが使用されているが、多くは二次元の世界の住人に対して使われるだろう。本当にいたら始末が悪い。何も無いところで転ぶなど、現実には起こり得ないのだ。もし転んだのなら、そこに何かあったとしか思えない。

どのように対処していいかわからないようで、とりあえずこぼれ落ちそうなところをスプーンですくい上げるといふ応急処置をとっている。それをまた真ん中に戻すのだから、全体的な体積は保存されたままである。つまり意味がない。

「食べたらどうだ？」俺は提案した。

「ああ、そうか」合点がいったようだ。

俺は特に救いの手を差し伸べようとはしなかった。こぼれるのが落ち着くまで必死に食べ続けていたレイチェルから顔を背けてやるくらいの気遣いはしてやったが、それ以外は何もしていない。自分の皿を片づけるのに忙しかったからな。こぼれた分はあとで拭きとればいだろうと考えていた。

俺はさっさと自分の分を食べ終え、店員にダスターをよこすよう頼んだ。それをレイチェルのほうへ差し出してやると、「あんたが拭いてよ」と不条理なことを言うのだった。

もちろん拭いてやらず、ダスターを顔に投げつけてやったのだが、これはキャッチされて防がれてしまった。このとき、俺はこいつが機敏に動けることをはじめて知った。

皿を引いてもらい、カレーをきれいに拭き取った机を撫でて、俺はテーブルの感触を楽しんだ。

「木のテーブルって触り心地がいいな。各所でこぼこしているのに全体としてはつるつるしている矛盾がいい」

「変なの」そう言ってレイチェルは手を伸ばしてきた。

「ほら」

俺は手のひらに煙草とライターを置いてやった。

「ありがと」

煙草に火をつけて俺に返してくる。俺も自分の煙草に火をつけた。

「さっきの話の続きだけど」

レイチェルは煙を吐き出す。もうすっかり様になっている。

「ドラマではね、カップルがケンカを重ねてそういう反射的にノーって答える技法を身につける



ものだって言ったの。だから私たちも試してみるべきだと思って」

「要するにケンカを重ねて仲良くなりたいたいってことか」

「だって私たち、まだまだお互いの間に亀裂っていうか溝みたいなものがあるじゃない？」

それはどんなカップルでもあるだろう。他人から身を守るための本能的な防衛機能は人間なら誰でも持ち合わせている。

「だからさ、ケンカしよ？」

俺はため息をついた。

「お前な、ドラマを鵜呑みにするのはよくないぞ。あれはフィクションなんだから」

「でも人間関係についてはリアルにつくられてるんだから」

そこから学ぶこともあると思うの、と主張するレイチェルはわりと真剣な表情をしていた。俺は呆れてものも言えない。

「もっと自分を信頼してやったらどうだ？」

恋愛についての考えで何かに依存するとうろくなことがない。恋愛指南本みたいなものがあるが、あんなものを誰が読むというのか。恋愛をしている世の中の人間はほとんどあいつた指南本を頼りになどしてないだろう。なぜなら世の中の人間はほとんどが理知的だからである。まともな人間は自分で考える。馬鹿げた指南本を楯に戦うのは馬鹿ばかりだ。

「でも私、自分に自信がなくて」

レイチェルが啜る煙草の先がたらんと下がった。

煙草を消して席を立つ。支払を終えて外に出ると、空気が冷たかった。

「家に来て」

「べつに構わんが」

俺たちはレイチェルの下宿へと向かった。いつかのように、自転車に乗ったレイチェルをうしろから支えてやる。五分ほどで着いた。時刻は六時前である。

部屋に来るのは何度めだろうか。いちいち数えていないが、家具の配置を見ずとも言える程度には回数を重ねている。泊まることもあれば、日付が変わる前に帰ることもある。

「今日はケンカについて話し合いましょ」コーヒーメーカーをセットしながらレイチェルが言った。

「そんなもん、甚だ無益だと思うがな」俺はソファに腰を下ろした。

「でも私はしたいの」

「ケンカを？」

「そうよ」

そこまで言うなら、気乗りはしないがつき合ってやらんでもない。

「じゃあ、あんた話して」

「何をだよ」

ぼこぼこメーカーが音を立てはじめる。湿った空気がリビングにまで流れ込んできた。

「過去の女遍歴よ」

「まさかそれをケンカのネタにしようってのか？」

「ダメなの？ 私のことはもう話したでしょ？ このままじゃアンフェアよ」

たしかに聞いたが、俺は怒る気にもならなかった。当然だろう。

「聞きたいのなら話そう。コーヒーができてからな」

俺はカップを受け取り一口すする。熱くておいしい。しかし、

「お前、これわざと薄くしただろ」

「はあ」

落胆したように頭を落とすレイチェルである。こういった見え見えの罠を仕掛けることでケンカへともつれ込もうと目論んでいるのだろうが、どうにも俺には怒る気にならない。

「そうじゃなくて、『お前これ薄いだろ！』って怒ってくれなきゃダメじゃない！」

「少し俺のことについて話したほうがいいな」

「えっ、何？」

「あんまりこういうことしないほうがいいってことをわかったほうがいい」

「どういう意味？」

俺はこれまでの人生で、他人に対して心の底から腹を立てた経験がない。うんと幼い頃はどうかかわらないが、少なくとも記憶がある限りではそういう経験は皆無であった。

これは俺がいつの間にか築き上げてしまった防衛機能であると分析している。つまり、怒りを蓄積する前に、その対象への興味関心をばっさりとなくしてしまうのだ。そうすることで、怒る意味を失い、無益な憤怒を抱え込まないようにしている。これは現在では無意識に行われるので、嫌なことがあると怒るのではなく先に関心をなくしてしまう。結果、対象への興味が薄れ、どうでもよくなってしまふのだ。

客観的に評価すると、これはじつに優れた機能である。先見性の高い防火シャッターのようなものだ。反応速度が大きいという点も評価できる。余計なエネルギーの消費を抑える点で効率もいい。安定性が高く、自己の防衛としてはこれ以上に優れた性質はないといっても過言ではないだろう。

この機能は主に人間を対象として働く。つまり、俺は嫌な奴に対して極めて素早く興味を失う。距離をとって自らを守るのだ。過去に幾度もそうやって人を見限ってきた。そしてその判断が間違いであったと後悔したことはない。

俺が思う嫌な奴というのは、知的でない、あるいは不条理な人間である。馬鹿と表現すると間違っていないがニュアンス的に正しくない気がする。もっと人間として見下すような、ゴミみたいな奴のことだ。そういった要素を少しでも持っているともうダメである。

過去につき合ってきた女は例外なくこれが原因で別れてしまった。はじめは謙虚にいい顔をしているから俺も気にならないのだが、少し時が経つと表皮がペリペリと剥がれて本性がむき出しになる。それは皆醜かった。結果、俺は対象への興味を一切失い、そっけなく冷たい態度をとるようになる。普段からそんな感じだが、それに輪をかけて冷たいのだから、相手は俺と話しているだけで気分が悪くなり、腹を立てて地団太を踏み、最後は泣いてしまう。しかし俺には相手が悪いという確固たる信念があるため、謝るでもなくその場で見捨てて立ち去るのだ。

とんでもない鬼畜だと思われるかもしれない。ゴミはお前だと罵られるかもしれない。しかしこれが自己を保護するためにもっとも効率のいい優れた機能なのだ。なぜまわりの皆が実践しないのか、俺にはたんと理解できない。

俺は独白を終えて、煙草が吸いたくなかった。立ち上がってベランダに出ると、うしろからレイチェルがついてきて、俺の隣に立った。

「もしかして、私危なかった？」

「少しな。でもまだ俺はお前のことを馬鹿で面白い奴だと考えている」

「ほんと？ 私のこと好き？」

「だから馬鹿で面白い奴だと考えている」

「じゃあこれからは気をつけるね」

「そうしたほうが賢明だな」

「ほんと、あんたって変わってる。どうしてまわりに人が集まるのか全然わかんない」

「俺も知らんな」

ふたりで煙草を吸いながら、ぼんやりと外の景色を眺めた。もうすっかりあたりは暗い。電源の入っていないディスプレイのような暗さだ。

「ねえ、寒いから中に入ろう」

「そうだな」

たしかに俺も寒かった。だから俺の腰に腕をまわすレイチェルを払いのけようとは思わなかった。

「ちょっとあんたのことがわかってよかった」

ベッドで毛布に包まり掛け布団で顔半分まで埋まったレイチェルが言った。布団の中はあたたかい。やはりこの季節はひとりよりもふたりのほうが熱効率がいい。

「そうかい」

「私たち、距離を縮められたかな？」

「さあな。ケンカはしてないがな」

「やっぱり心の衝突が必須よねえ」

「俺は止めておいたほうがいいと思うが」

「あんたの話聞いて私もそう思っちゃった。でも近づくにはお互い生身の戦いが必要だと思うの」

「まだこだわってるのか」

「だって」

レイチェルはもぞもぞと移動して俺に覆いかぶさる。首筋に顔を埋めると、茶色のごわごわした髪が俺の頬に当たった。

「これでもまだ遠い気がする」

「気のせいだろ」

くすぐったいので、俺は顔を動かして安定な位置を探した。しばらく動いてみたが、どこにいても頬に髪が当たるので、レイチェルの身体ごと横にスライドさせて俺は自分の身を逃れさせた。

。

「ほら、離れちゃう」

「髪がくすぐったいからだ」

「ねえ、こっちきて」

すぐ隣にいるのにこれ以上どこへ行けというのか。

「もっと近づいて」

仕方なく俺はレイチェルの身体を自分のほうへ抱き寄せた。

「もっとぎゅっとして。そのまま離さないで」

「贅沢な奴だな」

「ダメなの？」

「べつに」

「じゃあ、して」

俺は両手をレイチェルの背にまわしてしっかりと抱いた。大きくはないがかたちの整った胸が身体に押しつけられる。つるんとした脚に自分の脚を絡ませる。しっかりと密着した状態となり、さらにあたたかくなった。

「これもいいけど、もっとほしい」

「本当に贅沢だな」

「それが好きってことでしょ？」

「さあ、知らんな」

「知ってるくせに」

俺はレイチェルを気の毒に思った。というのも、どうやらこいつは俺が自分のことを好きだと思っ込んでいるようだと察知したからだ。

先にも伝えたとおり、馬鹿で面白いとは思う。つまり興味関心としてはポテンシャルが高いといえる。しかし好きとは違うし、言った覚えもない。

好きである状態がどういうものであるかくらい、俺は正確に理解している。経験があるのだから当たり前だろう。そのときの想いと比較してみても、現在俺がこいつに抱いている感情は好きとはいえないと明言できる。あの相手以外の事象が一切どうでもよくなる錯乱状態に等しい感情とは違う。

相手に好きと言われて好きになるという方式がたしかに存在するらしいが、俺にはどうにも信じられない。それは好きではなく罪悪感の類ではないのか。あまりに一方的に受け取り続けるのが悪いから、自分も相手のことが好きだと錯覚しようとしているのではないだろうか。つまり受け取り続けることをおそれて罪悪感を楯に逃げ出し、相手が好きだと誤認することによってすべてから逃げようとしているのだ。これは俺の持論だから、意見を同じくする人はもしかしたらいないかもしれない。

「ねえ、何考えてるの？」

「ケンカになりそうなこと」

「ほんと？ 言ってみて」

「本当に聞きたいのか？」

「うん」

「やめておいたほうが平和でいいと思うがな」

「でも考えてるんでしょ。偽りの平和なんていらない」

「それもそうだな」

ふたりでコーヒーを飲みながら並んでソファに座っている。俺が話を終えてから空気が凍りつくような沈黙が続いていた。

「私はどうすればいいの？」レイチェルの目には涙が浮かんでいる。

「どうもしなくていい」

「でもこのままじゃ、私ばかりつらい」

俺が話したのは現時点ではお前のことを好きではないということと、相手から好きだと言われ

て好きなるということは罪悪感から来る錯覚だという持論の展開だった。

「どうして？ 私はこんなに好きなのに」

「相互の関係は必ずしも可逆とは限らないってことだろ」

「もう、わかんないよ」

ついにレイチェルは膝に顔を埋めてしまった。肩が細かく上下している。

「なんで私ばかりこんな目に遭うの？」

気の毒だとは思いますが、俺にはどうしようもない。謝るのも違うだろう。

「べつに可能性がゼロってわけじゃないだろ」

慰めというつもりはないが、事実だと思ったので口にした。

「これから俺がお前を好きになることだって考えられる」

「どうしたら？」レイチェルが顔を上げた。本当のひどい顔というのは、寝起きでぐちゃぐちゃな顔ではなく、これを指しているのだろう。「どうしたら私のこと好きになってくれる？」

「さあ、俺は知らない」

「あんたが知らないなら、誰が知ってるの？」

もしかしたら知っている奴がいるかもしれないと思ったが、説明するのが難しかったので、俺は沈黙を選択した。

「このまま続いていくの？ 希望はあるの？」

「わからんな」

「私はどうしたらいいの？」レイチェルがさすがのように俺の腕にしがみつく。「ねえ、どうしたら？」

ここまで来ると罪悪感の大きさをたや、海に浮かぶ氷河に匹敵する。冷たく硬く、ひよっとしたら見えていない部分はずっと大きいかもしれないのだ。

「お前は どうしたいんだ？」俺はきいた。

「私のこと好きになってほしい。想いに応えてほしい」

じつに率直な言葉だった。まがうかたなき本音だろう。

「前に好きだった人は？」

急な質問に俺は答えに窮した。

「どういうことだ？」

「どんな人だったの？ どうして好きになったの？」

「きいてどうする？」

「そこから学べるかもしれない」

それはないだろうと正直思う。

「ねえ、教えて」

こういう必死さが俺には足りないのだろう。がつがつして醜いと感じてしまうから本能的に避けているのかもしれない。

「今まで誰も好きになったことないの？」

「いや、ある」

「じゃあ誰？ どんな人？ なんて別れちゃったの？」

できればあまり言いたくなかった。しかし氷河のように大きな罪悪感が、俺の心に押し掛かる。つぶされて押し出されるように言葉が俺の口からこぼれた。

「別れてない」

「え？」レイチェルが止まった。文字通り停止したのだ。

ゆっくりと俺から距離をとる。先まで見せていた必死さがすうっと退いていくのがわかった。

「どういう意味」

「いや、うまい表現が見つからないんだがな、別れようとしても物理的に無理なんだ」

「よくわかんない」

「つまりな」俺は正直に言った。他人に話すのははじめてだった。「もう存在していないんだ」

午後十時すぎにはレイチェルの下宿を出た。家に着いたのは十時半すぎだった。

すぐに風呂に入り、上がってからベランダに出て煙草に火をつけた。まだ京都タワーは市内に光を投げている。街も煌々と輝いて眠ろうとする意思は感じられない。

煙を吐き出しながら、先の会話について考えてみた。

あのとき、どうして俺は正直に包み隠さず事実を話してしまったのだろう。もっともらしい嘘で塗り固めて乗り切ればよかったのに。いつもはそうしているのに。

やはり罪悪感に苛まれたせいだ。俺は基本的に善人だから、居た堪れない状況に陥ったとき、性善説が保障するところの善人になってしまうらしい。

しかし、話をしながら自分でも驚くほど玲子のことをクリアに記憶していたのは新鮮だった。もう小学生が高校生になるくらいの年月はすぎているというのに、記憶は風化していない。本当に好きだったからだろうか。それとも俺が記憶力にことさら優れるためか。

一度思い出すと華開いたように玲子とすごした日々が頭の中で展開される。一緒に行った祇園祭、わざわざ並んでまで観た映画の最新作、清水寺ふもとの三番坂で食べ歩きをした休日。

客観的にみると、俺たちはずいぶん京都を満喫していたように思える。主要な観光地はすべて抑えているのではないか。まるで「京都オススメデートスポット」とかいうガイドブックに従って行動していたようにも思える。ふたりともそういった本を買ったことがないから適当にまわっていただけなのだが。俺に内緒で玲子がこっそり入手していたという可能性もなきにしもあらずだ。

その頃の俺は今の俺とほとんど変わりが無い。これは外見的なハードの変化ではなく、内面的なソフトの変化という意味だ。つまり、あの頃すでに俺は植物系男子として完成していた。

恋愛や部活や勉強に対する姿勢はどれも消極的だったが、意図せずに、いずれもうまい足運びをみせたというのはもはや才能ではないかと俺も驚くほどだ。これではまるで自分の能力をひけらかしているようで、自分でもなんだお前はと言いたくなるが、本当のことだから仕方がない。俺は何をやっても大成する人間なのだ。ゆえに失敗や挫折といった経験がない。

唯一俺を苦しめた出来事が、玲子の死である。人の命とはあつけないものだとあれほど痛感した日はない。あれほど万事に興味関心を失くした日もない。日々、うっすらではあるが、俺は世俗に対して希望を抱いていたのだ。現実とは、少なくとも玲子のような人間を発見できる可能性を含有している環境なのだ。

玲子の死が、俺の植物化に拍車をかけた。すでに立派な植物だったが、より一層世俗への関心を失くし、もういつ死んでもいつ踏みつぶされても構わないレベルまで、精神が生きるエネルギーを失っていた。道端に咲く春紫苑と変わらない心理構造にまで堕ちていただろう。

その後、時はすぎ、俺は高校生となり、新しい生活の中に玲子の姿を探したが、もちろん代替物となる人間はいなかった。はじめから期待などしていなかったが、探さずにはいられなかったというのが本当だ。

玲子の死を飲み込むことはすぐにできた。もういないのだからそれは容易だ。顔を見ることができない、肌に触れることができない、抱きしめることができない、キスができない。様々な不



可能が否応なく俺を納得の境地へと追い込んだ。

よく恋人が死んでも受け入れられないという奴がいるらしく、そういった人間を題材にして小説やドラマなんかが描かれるが、それはそいつが馬鹿で弱いただけだろう。またそれを見る奴らはさらに馬鹿でゴミである。涙なしには見られない感動作などときれいな言葉で飾られるが、当の本人からすれば余計なお世話である。同情や共感などされたくないと思うのが普通だ。フィクションならメディア芸術としての価値があるが、ドキュメンタリーだとつくる奴も承諾した当人も馬鹿ばかりである。死んだ人間はおそらく皆を罵って嘲笑っているだろう。「私が死んだことがそんなに悲しいの？」と。

玲子ならそう言うに違いない。俺にはわかる。

玲子の話をし終えたあとのレイチェルは、俺に対してどう対応していいのかわからないといった印象が色濃かった。おそらく身近な人を亡くした経験がないのだろう。祖父母が亡くなるのと、同学年の人間を亡くすのでは訳も色も種類も違う。

俺は平然と話して聞かせた。玲子の名前を口にするのは久しぶりだったが、すらすらと思い出話やら特徴やらが口をついて出てきた。忘れていない自分に驚きながらも誇らしく思ったものだ。

レイチェルの部屋をあとにするとき、彼女は俺にうしろから抱きついてきた。声は聞こえなかったが、泣いていただろう。涙の意味はきかなかつたが、もし同情の類なら今から押しかけて絶縁状を突きつけてやってもいい。おそらく違うという程度に俺は彼女を信頼しているので、ペランダで煙草を吸っているのだ。

煙を吐き出しながら自分が感傷に浸っているのかどうか外から観察してみた。つまり、内側いながら自分を鳥瞰するのだ。まるで四次元の世界だが、客観性とはつまりこういうものの見方ができるかどうかだろう。

俺はいつも通りだ。精神も希ガスの電子配置のように安定している。

俺は馬鹿ではないから、感傷になど浸ったりしないのだ。

十二月はイベントが多い。その中でも最大級なのはやはりクリスマスだろう。

サンタクロースとは何者だろう。人間ではないことはたしかだ。なぜならもしサンタが人間だといろいろ矛盾が生まれてくるだろう。物理や倫理に背く行動をとりすぎているからだ。

第一、クリスマスとはキリストの誕生日ではなかったのか。サンタなどクリスマスの起源とはなんの関係もない。またプレゼントを交換したり、恋人とすごすという決まり事も起源とは無関係である。

などと言いがかりに近い理論を展開しても誰も聞く耳もたないのは、もはやクリスマスの定義が塗り替えられているからで、現代ではサンタの存在を固く否定しながらも子供たちに「サンタさんがやってくる」と夢見事をささやいて園長先生のコスプレで押しとおすのである。大人になると、「園長先生がんばってたなあ」とぼやきながら恋人たちは仲睦まじく手と手を取り合い、プレゼントを交換してディナーを奮発し、ホテルにしけこむのだ。

まったく呆れたものである。

また、クリスマスもニューイヤーもなぜか前日のほうが重要性が高い。当日にほとんど価値はないと言っても過言ではない。本末転倒甚だしいが、誰もがその事実を目を瞑り、浮かれ騒いで多大なエネルギーと莫大な金が消費されるのだ。

本当にどうかしている。

俺はそういった記念日的な行事をこれっぽっちも大切にしていない。自分の誕生日なんて毎年忘れてるし、他人の誕生日を誰にもきいたことがない。植物系男子は、自分からの積極性は皆無である。

クリスマスやニューイヤーに騒いだりはしゃいだり浪費したりしようという気が起こらない。キリストなんて会ったこともないし顔も知らない。新年を誰が定めたかも聞いていないし、一年というサイクルの取り決めの会合に参加した覚えもない。俺には無関係なのだ。

現代を生きる人間の九十九パーセントはこういった行事に自分がなんら関与していないにも関わらず、調子に乗って浮かれているのが俺には不思議だ。大昔の人間がつくり出した風習に踊らされているようで気持ちが悪い。誰もなんとも思わないのだろうか。皆、何を考えて生きているのか。

では玲子の命日すらもお前は気にしないのか、ときかされると、その通りである。気になどなかったことがない。死んで一年が経った日は、玲子のことを思い出すでもなくほかの誰かと遊んでいた。あとで「ああ命日だったのか」と気づいたときも何も思わなかった。

そう聞いて最低のゴミ野郎だと俺を罵る奴がいるだろう。そう思うなら構わない。世間体が悪いのはたしかだ。

反論など何もないが、玲子ならこう言うだろう。

「それでこそ私の彼氏」とな。

もちろん「私の命日になったら思い出してくれる？」などと先読みした会話をしたことはない。だが、つき合ってきたのだからわかる。玲子と一緒にいたのは俺を罵倒した誰でもなく、この俺だ。もしこのことで彼女を批難するというのなら、俺も重い腰を上げねばなるまい。彼女の汚

券は穢させない。

あの夜以来、レイチェルは混乱を極めてカオスのるつぼに身を投じてしまって現実を見ようとしなかった。どうやら玲子に対して負い目のようなものを感じているらしく、

「私、玲子さんのかわりが務まるかな？」

などとわけのわからぬことをきいてくる。もう昔のことだから気にしなくていいと言っても、「ううん、あんたは彼女のことが忘れられないのよ。だからそんな性格なのよ」

と俺の人格まで否定してくる。一般人は生き別れを美しいものだと誤解しているようだ。生き残ったほうに残された傷が心を蝕み、人格に作用して人間を変えると本気で信じているのだ。こちらが弁解しても暖簾に腕押しで、聞く耳を持ってもらえない。ならば「もうそれでいいよ」と諦観の境地に入らざるを得ない。

そんなわけでレイチェルはずっとひとりでうんうん言いながら見えない何かと毎日戦っている。敵は玲子の亡霊だろうか。玲子の顔など知らないはずだから、どんな女を想像しているのか、見てみたい気もする。

「玲子さんといつも何話してた？」

クリスマスイブの前日、レイチェルがもう我慢できないといった調子できいてきた。

「何って、他愛もないことだけど」

玲子と話したことは本当に他愛もないことばかりだった。大抵俺がぼつりと呟いたことについて玲子が激しく言及し、俺がそれについて意見を述べると玲子がさらにヒートアップする。俺は常に平熱だった。上がっていくのは玲子の燃える闘魂ばかりである。

「私ともそんな話してよ」

「いいけど、お前には向いてないと思うぞ」

「どういう意味？」レイチェルの瞳がぐっと濃い色になった。瞳の奥で輝くのは嫉妬の色か、闘志の色か。

「たとえば、ダイエットの本ってなんであんなにたくさん出てるんだ？」

「え？ えーと、そりゃいろんな成功例があって、それぞれに自分の理論を展開してるからじゃない？」

「じゃあどうしてその中から優れたひとつが発掘されなくて、ずっといろんな方法が模索され続ける状態が続いてるんだ？」

「うーん、わかんない」

「ほら、向いてないって言っただろ」

「そんなこと知らないもん」

「玲子も知らなかったよ」

「同じことを玲子さんと話したの？」

「あのときはこの話題だけで映画が二本見れるくらい話したな」

「それ、楽しかったの？」

「え？」

「何時間もくだらないことでしゃべり続けられるくらい、彼女との会話が楽しかったの？」

「そうだな、俺の唯一の趣味だったかな」

よく考えたら、これまで楽しいと思ったことはそれだけかもしれない。もっと細かく、瞬間的に快楽や嗜好によって気分がよくなったことはもちろんあったが、本当に楽しい、心から愉快だと思ったのは、玲子との会話のほかにない。

「あいつとしゃべるのは愉快だった」

「それができなくなって悲しくなかった？」

「そのことはあんまり悲しくなかったな。それよりも存在が消え失せてしまったことのほうが堪えた。普通そうだろ？」

「うん」

ここは俺の家のベランダである。「あんたの部屋が見たい」と言ってレイチェルが押しかけてきたのだが、俺には目的がわかっていた。

いつ言いだすのかとしばらく待っていても、部屋の中を見渡すだけで何も話さない。自分が玲

子と同じ景色を見ていることを妄想しているのだろう。

俺の部屋にはものが少ない。十二畳ほどの広さだが、あるのは机と椅子と本棚とベッドくらいのものである。テレビすらない。俺には高校の頃からテレビを見る習慣がない。

家は一戸建てで、俺の部屋は三階の東側である。夏の朝は溶けてしまうほど熱く、日中は天井に電熱線でも走っているのではないかと思えるほどに極暑だ。冬は一階よりもあたたかいが、それでも今日の気温は五度ほどで、手がかじかむほどに寒い。

それでもベランダに出るのは室内では煙草を吸わないと決めているからだ。部屋の壁にヤニがついてしまうのを俺は嫌う。基本的にきれい好きなのだ。

今はひとりベランダで煙草を吸っている。ガラス戸一枚向こうでレイチェルが俺の部屋の捜索をしている。好きにしろと俺が言ったのだ。勝手にやってしまう奴が前にいたが、すぐに別れてしまったので名前も覚えていない。

令状もないのに家宅捜索してしまうという点からもわかるとおり、恋する乙女とはどこか病的なものだ。たとえば浮気を繰り返す夫に電撃リンチを敢行する押しかけ妻がいたではないか。往々にして、恋とは人間をおかしくしてしまう不治の病なのである。

できるだけ丁寧にしてくれ、といった俺の言葉が聞こえなかったのか、ありとあらゆるものをひっくり返して捜索を続けているレイチェルである。ついでにいかがわしい本でも見つけてやろうという腹かもしれないが、俺はそんなもの所有していない。これまで皆にそう言って聞かせてきたのだが、誰も耳を貸さなかったのは遺憾である。男たるもの、いやらしい本の一冊や十冊くらい持っていて当然と考えているのだろう。しかしそうでない男もいるという厳然たる事実を知らないのは女ばかりである。

俺は煙草を灰皿に捨てて部屋に入った。

「収穫はあったか？」

外は五度だというのに、レイチェルはシャツ一枚に下着姿でちよろちよろと動き回っている。

「寒くないか？」

「私、今京都で一番アツイ女だから」

「そうかい」

背に手を当ててみたがたしかに熱い。シャツが湿っていて汗をかいているのがわかった。

「ほしいものがあつたら言ってくれば出してやるよ」

「じゃあ玲子さんに関するすべてのものを」

すべてと言われても、玲子に関するものなどほとんどない。

「じゃあとりあえずこれを」

俺は本棚の一番下にあつた中学校の卒業アルバムを渡してやった。

「これ見つけられなかったのか？」

「そんなところにあつたんだ……」

じつにわかりやすい場所だと思うのだが。

レイチェルは目がこぼれ落ちるのではという目つきで食い入るようにアルバムのページを繰っていく。集合写真にまず目を止めた。

「どこ？」

「何が？」

「玲子さん」

俺をはじめに探さないあたりが、本末転倒というか、愛を疑ってしまう行動である。気をつけたほうがいいと指摘しようと思ったが、俺は写真の中の玲子を指差してやった。

「これ」

「ほほう、ほうほうほう」

なんだそのサンタみたいな声は。

「すごく普通ね」

俺もそう思う。玲子は容姿に目立った印象のある奴ではなかった。ところで普通を強調すると、どういう意味になるのか。

「こんな顔してあんたといやらしいことしてたんだ。うぜえなあこういう奴」

聞き捨てならなかったが、レイチェルの顔が真剣にこいつが憎いという表情だったので、頭を叩くくらいの軽いつっこみにしてやった。

「やかましい」

「うわ、これあんた？」

「よくわかったな」

「眼鏡かけてるし、頭にキノコ！」

俺の容姿はひどいものだった。散髪嫌いで髪は伸び放題、幼い頃から近視と乱視のユニゾンで、眼鏡のレンズは音楽の教科書よりも分厚かった。必然、容姿は悪く見える。

「これでよく玲子さんを落とせたね」

「俺は何もしていない。玲子が勝手に落ちてきたんだ」

それは本当だった。俺のどこに惹かれたのやら、玲子からアプローチをしてきて気づいたら一緒になっていたのだ。

「なんでだと思う？」

「何がだ？」

「玲子さん、あんたのどこに惚れたのかなって」

「さあな」

じつはきいたことがある。俺のどこがいいのかときくと、

「将来性を見込んで今から投資するのです」

などとブローカーのような返事をしてきたので、俺はそのときかなり笑った。小学校生活全部を足し合わせても足りないくらい面白いと思ったのだ。

「俺のどこに将来性を見込んだんだろうな」俺は思い出しながら自然に笑顔になっていた。

「さあね。中身は変わってないんだから、顔じゃない？」

顔はたしかに変わった。いや本当はほとんど成長しておらず、ひげが濃くなって頬がこけたくらいだが。髪型はきのこから一般型に、眼鏡もコンタクトにかえた。すると、驚くほど女の子受けがよくなった。これを見込んで先に買い抑えていたのだろうか。

「たぶんそうだね。私もそう思うもん」

「どう思うって？」

「なんか、将来性有望っていうか、高校デビューしそうな感じ」

「そんなもんかな」

「玲子さんは慧眼ね。先見性に優れてるわ」

そこまでわかるのだろうか。女の男を見る目というはわからないものだ。

ページを繰っていくと今度はクラス別に顔写真が載せられていた。俺は三組だったが、レイチェルは三組のページをさらりととぼした。

「玲子さんいないじゃない」

「いるわけないだろ」

クラス別の顔写真は卒業直前に撮影されたものだ。玲子はそのとき俺と同じ学校にはもういなかった。

「そうか」

レイチェルがぱたんとアルバムを閉じた。

「ほかには？ ふたりで撮った写真とかは？」

「いやそういうのは一切ない」

「なんでよ」

「撮ったことないからだ」

「一度も？」

「ふたりともそういう思い出づくりみたいなことに興味がなくてな」

「変なカップルねえ」

「そうかもな」

「じゃあ玲子さんにもらったものとかもないわけ？」

「なんもない」

「すごいドライじゃない。本当に好き合ってたの？」

俺は頭をかいてこめかみを指で叩いた。動作に意味はない。記憶を引き出そうとしているのでもない。ただ、答えに詰まっただけだ。

余計なことを言いそうになったが、ぐっと怒りに似た感情を堪えて飲み込んだ。かわりに舌が勝手にしゃべった。

「たぶんな」

「玲子さんとはどんなケンカした？」

「またその話か」

「ケンカしなかった？」

「ケンカらしいケンカは一度もしてないが、言い合いは毎日してた」

「言い合いってケンカじゃなくて？」

「ささいな意見の衝突みたいなもんだな」

「たとえばどんな？」

「たとえば、ふと俺がなんで戦争なんてするんだろうな、って言うと、あいつはそりゃ自分たち

を守るためですよ、と答える。そうじゃなくてどうして争う必要がある？ ってきくと、それはコミュニティの分散に議論が向きますがよろしいか？ と言う。それで答えが出るのか？ と言うと、だから言ってるんでしょ！ と熱くなる」

「それ声真似？」レイチェルがくすくすと笑った。

「いや、違うが」

「かわいいね」

「それはよかった」

「玲子さんのことじゃないよ」

「それはよくないな」

「いいの」レイチェルが俺にしがみつく。「それでいいの」



レイチェルが帰ったあと、ベランダでひとり煙草を吸いながら考えた。

ケンカってどうやるんだ？

レイチェルが望むケンカは、恋人同士の絆を深めるものらしい。俺が思うに、そんなものに意味はない。また俺にはできそうにもない。

というのも、俺という人間は、ケンカの種が萌芽する前に予防策として相手を嫌いになるという性質があるからだ。これは前述したとおり、自己防衛機能の一種である。

プライオリティとしては、頭にカチンとくる前に自己防衛が発動するから、ケンカには至らず相手が嫌いだという事実のみが残る。ケンカは起こらず、絆が深まるどころかさらに深い溝ができてしまうだろう。

玲子と話して自己防衛が働いたことは一度もなかった。あいつは俺が頭にくるようなことは何も言わなかった。これは、あいつが細心の注意を払っていたなどという殊勝な配慮の結果ではなく、単につまらないことを言わない人間だったのだ。その点からも、あいつは頭がいいと俺は評価していた。

レイチェルはときどきうっかりすると火種になってしまいそうな危うい発言をする。しかし今のところギリギリセーフである。自己防衛のシャッターが下りるような発言はない。

だがあいつはケンカを望んでいて、ひよっとするとシャッターが下りかねない危険な言葉を繰り返してしまうかもしれない。そのときは、俺は躊躇なくあいつを嫌いになるだろう。そうなったらもう罪悪感云々も関係ない。

この危険性はあいつに説明済みだ。それを承知でなおもケンカを望むというのはいかがなものか。ドラマを妄信しすぎではないのか。海外のドラマなどよく知らないが、そこまで人間関係を緻密に繊細に描いているのだろうか。フィクションを現実を持ち込むとほぼ確実に失敗するというのは歴史が証明しているようにも思うのだが。

しかしまあ、そこまで彼女がケンカを望むなら、俺はもう何も言うまい。あいつもまったく馬鹿ではないだろう。ケンカの種を蒔くにしても、殊勝な配慮をするに違いない。無差別に不条理な言動を繰り返してはダメなことくらい、重々承知のはずだ。

もう流れに身をまかせよう。あいつの好きなように動いてもらおう。それでダメだったらそのときはそのときである。

クリスマスイブの朝、慎也から電話があった。

「お前、今日はレイチェルと予定があるのか」

「さあな、俺は知らん」

「お前が知らんと誰が知ってるんだ」

「レイチェルが知ってるだろう」

「本当につき合ってるのか？」

「さあな。お前に教えてやる必要はない」

「お前の恋愛感は理解できないな」

「そんなもんしなくていい」

「じつは昨日レイチェルから相談を受けたんだ」

「そうか」

「そうかって、内容はきかないのか？」

「べつに興味がない」

「どうしてお前なんかを好きになったんだろうな」

「本人にきいたらどうだ」

「もちろんきいたさ。曰く、私にもわかんないだとき」

「では誰にもわからんということだ。謎と呼んでもいい」

「とにかく、何やらケンカになってるそうじゃないか」

「いや、なってない」

「レイチェルが言ってたぞ。自分を全然見てくれないからむかつくとか」

「ああそうだな」

「お前レイチェルのこと好きなのか？」

「いやべつに」

「でも彼女だろ？」

「そうだ」

「それなのに好きじゃないと？」

「そうだ」

沈黙。

「もしもし？」

「彼女が不憫になってきたよ」

「いい奴だな、お前は」

「最低だよ、お前は」

「俺は普通だ」

「世界のどこを探しても、お前と普通概念を同じくしている人間はいない」

「ああ、だろうな」

何せ、もう死んでしまったのだからな。

「とにかく、これ以上は見るに堪えない」

「見なければいいだろう」

「そうもいかない。お前らの共通の友人として、俺にはできる限りのことをしなければいけないという使命があるんだ」

いつこいつはレイチェルと友達になったのだろう。

「それは立派な心構えだ。俺も見習わなくてはな」

「その気もないくせに軽口を叩くんじゃない」

「さすが俺の友人だ。見事に見抜いている」

「レイチェルからお前の昔の彼女のことを聞いた」

言葉が出ない。思考が急速回転して、慎也の言わんとすることを先読みする。

「ほう」

「ケンカがしたいのだろう。俺にまかせておけ」

「どうするつもりだ」

「安心しろ。俺にも常識という概念がある。お前ほど逸脱していないから、突飛なことをするつもりはない」

「俺は普通だ」

「とにかく、レイチェルは花園に行った」

「なんだと？」

「要件はそれだけだ」

電話が切れた。

死んだ人間の墓を建てる目的が俺にはわからない。墓とはなんのためにあるのか。

墓参りの意図するところはなんだろう。そこに行ってもこぎれいな空間に明らかな人工物であるすべすべの切石がいくつも並んで積み重ねられているだけである。そこには誰もいない。

死んだ人を訪ねる、と小さい頃は教えられた。たとえば、見たこともない祖父の墓参りにはじめて行ったとき、死んだ祖父に会えるのかと心躍りながら墓所を訪れたが、そこには誰もおらず、母親は重そうな切石に水をかけ、花を添えて饅頭を置き、線香に火をつけるだけだった。「どこにおじいちゃんがいるの？」ときいたら、「目の前にいるじゃない、さあ、あんたも手を合わせて挨拶するのよ」と言って切石の前に屈んで柏手を打って目を閉じるだけだった。

幼心に、「どこにおじいちゃんがいるんだ、嘘じゃないか」と不満を抱いたものだ。これは子供の素直な感想だろう。

俺は大人になり、一般的な墓参りの意図するところは伝聞により会得した。しかし、合点はいかなかった。やはり俺の童心が納得しないためだろう。大人の俺も、童心の不満に賛成の意を表明せざるを得ない。

墓を参っても、死んだ人間には会えない。そこに死人はいない。

だから俺は、玲子の墓参りにも行ったことがない。

昼すぎ、俺は花園の妙心寺の近くにある墓所の前に来ていた。花束も饅頭も何も持っていない。今は冬だ。墓所の管理者も訪問客の存在などこれっぽっちも信じていないだろう。

商店街に並ぶ店舗の間に細い路地がある。ここを進むと小さな墓所がある、という情報だけは知っていた。

俺は路地に入ってぽつぽつと歩いていった。今日は快晴で、気温も低くない。タートルネックの上に上着だけでも充分暖がとれるほどだ。

墓所入口の門の手前に見覚えのある自転車が駐輪されていた。俺の彼女のものである。

門扉を開いて中に入る。家に囲まれた中庭みたいな場所で、四方に切り取られた空には雲ひとつない。

墓に刻まれた文字をひとつひとつ読んで歩く。卒塔婆というのだろうか、細長い木の板がたくさんあった。黒墨で書かれた文字は風化して読めないものが多い。ずいぶん昔のものなのだろう。ここに本当に玲子が眠っているのか。

つい眠っているなどと表現してしまったが、玲子はここにはいない。眠ることすら許されない世界へと旅立ってしまったのだ。墓が俺の見えるところにあるからといって、玲子がいけない事実から目を背けてはいけない。

見てまわるうちに、真新しい墓石が見つかった。知っている名前が刻まれている。自分で篆刻したのだろうか。そんなわけではないが、玲子は書道が得意だったのだ。

墓石には、何も供え物が置かれていなかった。当然である。ここの管理人が夏が終わってから掃除したに違いない。饅頭など夏に放置しておいたら、どれほどの虫の大群を呼び寄せるかわかったものではない。

線香立てには水が少しだけ貯まっていた。俺はやや躊躇して、その場で煙草を取り出し火をつけた。深くしっかり煙を吸い込んで、墓石に吹きかけるように吐き出した。

常識がないわけではない。もしまわりに人がいればこんな蛮行に手を染めるわけがない。しかし、誰もいないし、線香は持っていないので、やむを得ずだ。煙が出ればなんでも同じだろうという理論を言い訳として展開しても誰も聞く耳を持たないだろうが。

フィルターを下にして、線香立てに煙草を立てた。なんともちようどの大きさだ。線香立ては火消しにちようどいい。本当はただの火消しなのではないかと思えるほどジャストフィットである。

俺は墓石の前に屈みこんで、しばらくぼんやりした。立ち上る白煙がブルーの空に昇っていく。俺の頭上ですぐさま霧消したのは、うしろから誰かが息を吹きかけたからだ。

俺は振り返ってうしろに立つ人物を見据えた。

「よう、お前ここで何してる」

「あんたこそ」

俺は玲子の墓石に向き直る。レイチェルは俺の隣に来て座り込んだ。

「おい、尻が冷えないか」

「大丈夫」

三角座りして膝を両腕で抱え込んでいるから、とても小さく見えた。存在自体に稀少で希薄な印象がある。

「ここに寝てるんだね」

「どうだろうな」

寝ているなどとは欠片も思わなかったが、説明するのが面倒なのではぐらかした。

「全部私が頼んだことなの」

「慎也にか」

「そう、あんたをここに呼びだしてもらったのも、この場所を教えてもらったのも全部慎也君のつて。すごいよね」

その点に関しては同感だった。いったいどんな情報網を駆使したのか想像もできない。俺の昔の彼女の墓の場所まで突き止めるとは、もはやプライバシーの侵害に近い。よその土地から来たというのにここまで精通しているのは不自然にもほどがある。どこか裏社会にでも通じているのではないか。

「やはりあいつとは一度拳を交えないといけないようだな」

俺が正確に意図するところは、ぼこぼこに殴り倒して高野川からゴムチューブで縛りつけて川流しにしてやるということである。

「ダメだよ、私が頼んだんだから」

「だからといって教えていいことと悪いことがあるだろう」

「あんまり責めないであげて」

「まあいい」

本当はいいなどとは思っていないが、それよりもこいつに言いたいことがあった。

「お前、慎也に玲子のことをしゃべったのか？」

レイチェルがかちんと固まる音が聞こえた気がした。先ほどよりも存在感が希薄である。目を開いていなければ、隣にいることがわからないくらいだ。

「怒った？」

やはりそうだ。こいつは俺を怒らせたいのだ。慎也と電話で話したときから気づいていたが、もし本当にそうだとしたらなかなか危うい賭けに出るものだなと思っていたのだ。

ケンカの種をこんなかたちで蒔くとはな。しかし俺がすべてを見越してしまったのは失敗だったな。シャッターを下ろすか下ろさないかはもう俺の判断だ。

「いやべつに」

シャッターは下りなかった。意識的に下ろさなかったのではなく、下りなかったのだ。

俺は自分でも驚いた。これは客観的に見ればかなりひどいことではないか？ 過去を勝手にばらされて、しかも墓まで土足で踏みにじられているのに。かなり不条理な行動だろう。どうしてシャッターが下りないのだ？

「怒ってないの？」

「自分でもよくわからんが、なんとも思わないんだ」

「なんで？」

「さあ」

本当にわからないといった様子をわかりやすく伝えようと、俺は首を左右にこきこき振った。

「私だから許してくれたの？」

隣を向くと、レイチェルがこちらを見ていた。存在感が戻っていた。

私だからどうのこうの、という以前に、俺は怒っていないのだ。だから許す許さないという問題は成り立ちからもうおかしい。許そうにもその対象がないからだ。

「べつに俺は怒ってないと言ってるだろ」

「でもこんなひどいことしたんだよ。怒って当然のことしたんだよ」

それは俺もそう思う。

「だがな、本当になんとも思わないんだからどうしようもない」

「それって、やっぱり私に気持ちがあるってことじゃない？」

それはどうだろう。つながりがわからない。接続詞が不明である。結合条件が曖昧である。ファンデルワールス力が弱すぎる。

「もう少し説明してくれないか」

「だからね、こんなひどいことしても怒らないっていうのは、私だから無意識のうちに許してるんだよ。たとえば慎也君がみんなに玲子さんのこと言いふらしたら怒るでしょ？ 私と同じことしてるのに。でも私には怒らない。これはやっぱり私があんたにとって特別からだと思うの」

女の妄想エンジンの推進力たるや、すさまじいものである。バサードラムジェットよりも性能として優れているのではないだろうか。妄想が生み出すエネルギーが妄想にさらに拍車をかける自家発電機能により、無限大のエネルギーを発散して妄想をまき散らしているのだ。

話の要諦としては、俺がこいつを特別扱いしていて、それを認めろというところだろう。妄想の産物であることは間違いないが、意外にも、それ以外に俺が怒らないことを証明できそうな仮

定はないように思われた。俺も妄想の餌食になっているのかもしれない。

「そう、なのか？」俺は誰にきくともなく語尾がしり上がりになってしまった。

「そうよ！」

レイチェルは勢いよく立ちあがり、俺が立てた線香代わりの煙草を抜き取ってしまった。

「見たか！ あんたの彼はもう私のものなの！ あんたがどれだけ彼の中で美化されてもね、生きてる人間には無限大の可能性があるのよ。あんたがどれだけじたばたしたって私には敵わないのよ！」

そうまくし立てて、高笑いするレイチェルを俺は隣で見上げていた。もし玲子が、レイチェルの声をきいていたとしたら、あくまで仮定の話だが、どう答えただろう。

俺にはだいたいわかる気がした。玲子はレイチェルには何も言わないだろう。そして俺に向き直ってこう言うのだ。

「やっぱり私が睨んだとおり、いい男になりましたね」

自惚れでもなく自慢でもなく、俺は玲子の思考をトレースしただけである。

ニューイヤーズイブの二日前、レイチェルは実家に帰っていった。どこか尋ねても、「だからアメリカだって」

と言い張っていた。どこへでも帰ればいい。アメリカだろうがオーストリアだろうが隣の星だろうが知ったことではない。

墓参り後、クリスマスのプレゼントは何かいいときかれたので、俺は「玲子を生き返らせてくれ」と冗談で言ったら、持っていたすべての煙草を燃やされてしまった。

あれほど俺を怒らせようと画策していたくせに、自分が怒って帰ってしまった。夕方まで家で本を読んでいると、レイチェルから電話がかかってきて、「今すぐ来い」と命令口調で言った。俺は躊躇せず電話を切った。また着信があって、「すぐに来ないと死んでやる」というぼそぼそした声が聞こえた。俺はまた電話を切った。

本を置いて、バイクに乗り、すっかり暗くなった街へと走り出した。北山通りはクリスマスに浸食されていた。おそらくここから南はすべてクリスマス一色だろう。もっともひどいのは四条界限だと推測される。京都駅周辺も大騒ぎだろう。

レイチェルの下宿に着くと、ちょうど自転車を出そうとしている彼女がいた。なぜかどてらを着こんでいる。完全な家着のままだ。

「何をしている」

「このまま四条まで行って、恥を晒して赤くなって、サンタと間違われて鍋の具にされに行くのよ」

「それは大冒険だな」

俺はバイクを降りてレイチェルの目の前に立った。

「何よ」

「べつに」

自転車を押して出ようとする彼女の行く手を身体で遮る。ぐいっと睨むような視線を送ってきたので俺も睨み返した。

「軽率だった、悪かった」

「馬鹿」

「馬鹿ではない」

「馬鹿よ。お墓で煙草吸ってるし」

「それは、たしかに馬鹿かもな」

「合ってるじゃない」

「ああ」

「馬鹿」

「もう入らないか？」

俺は寒いのだ。バイクで走るのと自転車を漕ぐのでは体感温度が雲泥の差である。

「私怒ってるのよ！」レイチェルが叫んだ。迫力がまったくなかった。

「じゃあなんで俺を呼ぶんだ？」



「立派に鍋になる前の姿をあんたに拝ませようと思ってね」

「鍋の具になんてならなくていいから、部屋であつたまるとしよう」

「でも私！」

「怒ってるんだろ。話は中で聞いてやるよ」

これ以上口答えするようなら、俺は帰ろうと思っていた。

レイチェルは何も言わず、さっと俺に背を向け自転車を片づけ、ずんずんとロビーに入っていた。俺もそのあとに続いた。

その後、レイチェルの部屋でささいな言い合いがあつたが、本当にささいなことだったので、俺はもう覚えていない。しかし客観的に評価して、これがこいつが望んでいたケンカではないのかと思えた。こんなもので絆が深まるわけがないと俺がけなすと、そこからまた火種が生まれてケンカになった。

俺はほとんど怒っていない。レイチェルがひとりで興奮しているだけだ。それでも傍目から見ればケンカのように映るだろう。しかも、これはひよっとすると、痴話ゲンカと呼ばれる類のものかもしれない。

玲子と話していた状況とよく似ている。異なるのは、話の内容だろう。玲子との会話内容は俺のふとしたどうでもいい呟きから展開する有意義なディスカッションだった。一方レイチェルとの会話では、主に俺のふとした言動に対して文句をつけるところからはじまりケンカとなる。どちらかというと前者が俺の好みだが、後者も悪くはない。玲子と違い、レイチェルはひとりで勝手に燃え上がり、その熱で俺を攻撃してくる。伝導する熱エネルギーにより、俺の温度も少しだけ上昇する。そうして話は展開していく。これは甲乙つけがたいな。どちらも好きだ。

痴話ゲンカによりふたりの絆が深まったとはとても思えない。なんら新たな情報を得ることもなかったし、有為的な意見のやり取りもなかった。それでも少なくともレイチェルは、自分が俺にとって特別な存在であると妄信して止まなかった。言うておくが、玲子についての冗談は火種のきっかけを与えるための俺のサービスである。あんな軽率な発言はしなければよかったと後悔している。

しかし、ケンカの仕方はわかったし、玲子のことについてレイチェルが暴挙に出るという行動に対して俺が怒らなかった、あるいは嫌いにならなかったというのは確実な進歩と言わざるを得ない。他人なら絶対嫌いになっていただろう。ひよっとしたら怒っていたかもしれない。よって背理法により、レイチェルが俺にとって特別な存在であるということは認めざるを得ない事実なのである。

植物系男子の日常2 -I love boring life 2-

<http://p.booklog.jp/book/25872>

著者 : Kyoji

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/ireadforpleasure/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/25872>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/25872>